

「群峰」記念号に寄せて

富山大学名誉教授 金子 幸代

今から20年ほど前、森鷗外を中心とした比較文学を講じるために富山大学に赴任し、未知の地であった富山で、新しい出会いや発見を重ねた日々を懐かしく思い出している。富山での暮らしが落ち着いてきた頃、荘厳な立山の威容と四季折々に変貌する日本海の姿を眺めているうちに、私のなかにいつの間にかふたつの夢が生まれてきた。ひとつは、「文学不毛の地」といわれる富山における近代文学研究を盛んにしたいという夢であり、他のひとつは、いつか富山に近代文学館を建設したい、という夢だった。

日本だけでなく世界に名だたる企業も多い富山の地は多くの実業人を輩出し、富山の売薬さんなど篤実に働く人々の姿で知られてきた。このような実業重視の富山人の気質から、ややもすると文化芸術への関心が薄いとされ、著名な文学者も、例えば隣県の石川県などと比べると少ない。しかしながら、私の接した範囲では、一般市民

のなかに文学に強い関心を寄せている人々やサークルは決して少なくなかった。そのような文学に親しむ会に呼ばれて森鷗外などについて講演したことも数多く、聴講者の熱心さに驚かされた。比較文学の学生たちも意欲的に文学を学んでいて、富山の文学を研究テーマにした学生もいた。

私自身も、文学に関心をもつサークルや個人と触れ合うことにより、富山の文学に関心を深めるようになり、さまざまな富山文学の先人たちを知るようになった。また、米騒動や「横浜事件」など富山に関わりのある近代史の大事件についても調べるようになっていった。

そのような中で、丸山先生、高熊先生、近藤先生、黒崎先生など、富山の近代文学を研究する方々と知り合うことができ、富山の近代文学研究を共同して進める「場」を作ろう、と構想がまとまった。こうして、講演会、シンポジウムなどを重ね、参加する方々も徐々に増えていった。やがて、富山文学の会に発展し、関係者のご努力により、規模も拡大していった。私も、自分が関係する各種学会、近代文学会北陸支部、比較文学会関西支部、社会文学会などの大会や研究会を積極的に富山で開催し、私や院生

も含め、富山文学研究者の研究発表の場を確保しようと努めてきた。それにより富山文学の存在について、他地域の研究者にも認識を深めることができたのではないかと考えている。

このように富山文学研究の気運が高まるなか、私の富山文学研究の対象は小寺菊子に向かうようになった。小寺菊子は「大正の3大閩秀作家」と称されていたが、ほとんど忘れられた存在になっていた。私はさまざまな出会いにより菊子を知り、その作品を読み進め、菊子の文学作品の重要性に気づくようになり、紹介や研究を進めた。幸い新聞や金沢文学館などで菊子を取り上げられるようになった。菊子の3巻本の作品集を桂書房で出版していただいたのも、うれしいことであった。

私のもうひとつの夢であった富山の文学館建設も、「高志の国文学館」の建設により実現することができた。これらから各種資料の収集が進み、富山文学研究の拠点として重みを増していくことを期待している。

本誌「群峰」も号を重ね、富山文学研究の深化を感じさせる研究論文や資料紹介が多く、これからの富山文学研究の峰々の一層の高みを期待すること大である。

森鷗外は、青鞥社同人である尾竹紅吉が新たに発刊する「番紅花」に寄稿を求められた際に、「サフラン」という巻頭文を書いた。植物のサフランと自らの関わりを幼年期からたどった内容であるが、結末は次のようになっている。

宇宙の間で、これまでサフランはサフランの生存をしてみた。私は私の生存をしてみた。これからも、サフランはサフランの生存をして行くであらう。私は私の生存をして行くであらう。

「番紅花」ならぬ「群峰」の一層の成長を祈り、これからも遠方の地から応援していきたいと心から思っている。